

# 学生と教員の見方

【学生の見方&考え方】  
(4年 菊池慶乎)

鐘の音が地域の象徴として親しまれている。

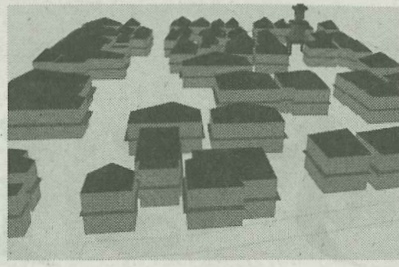
周辺には蔵造りの建物が連続して立ち並び、重厚な街並みが形成されている。

一方で、歩行者空間の整備や案内サインの設置など、観光地としての機能向上も進められており、

歴史的景観と現代的な都市機能が共存する地域となっている。

課題では、まず地図データを抽出し、QGISを用いて不要な要素を削除・整理した。その後、建物ポリゴンに高さ情報を付与し、整

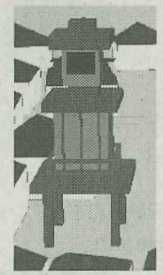
ったまま拡大・縮小できる。よ



時の鐘のある街区のCG

## AIでつくるまちなみCG③

【学生のアピールポイント】  
高校時代から建築を学び、3D再現の研究を行っている。



時の鐘のCG

理した座標データをP5.jsで表現するよう、Google Le Angi-gravityを用いてプログラムを作成した。このようにしてWebGL空間

上での3D可視化を実現した。

### 「時の鐘」周辺エリアを生成

### 具体的な指示の重要性を実感

よつコーディングした。屋根は段階的に縮小する独自手法によって反り形状を表現し、部位ごとの色分けによってテクスチャを用いず建築的特徴を示した。

AIは抽象的な指示では誤修正や動作不良が生じる

### 【教員の展開】 (齋藤千尋教授)

なった、というような捉え方ができる。

プログラムをAIが書いてくれるということは、AIが文章を書いてくれる、絵を描いてくれるのと似たような驚きがあるが、同時に、これまでのプログラムに、これまでのプログラムの言語の進化の延長にあり、文章や絵と比べるとさして驚くほどのことではないようにも感じている。教員の世代が普通に学んだプログラム言語は、人間の言葉に近いキーワードを並べ、それをコンパイルと呼ばれるプログラムが機械語に翻訳するように作られていた。プログラムを書くためのツールも高度になり、さまざまなコード自動作成機能が実現していた。それが、プロンプトと呼ばれる普通の言葉でできるようなになり、より人間に近い言語を機械語に翻訳してくれるように

今回登場の菊池さんたちは、大学で使えるGenerative AIの利用枠を使い切ってしまう、制限を回避すべく自分でAIツールを探してくるまでになっていた。このあたりの取り組みは、今まで、テキストに沿って言語を学び、教員のプログラムを見本に自分でプログラムを書いていたのとは比較にならないレベルである。教員が意図しない領域まで自主的に開拓していた。ただ、それはAIがコンピュータ内のデータにアクセスしやすい状況に作り出しかねず、このあたりは、適切なセキュリティ確保の指導の必要性を痛感した。また教員側も学生たちがAIに書かせたプログラムを丁寧に読み切ることができないような状態になった。

ことがあり、具体的な指示の重要性を認識した。再現対象の画像を添付することや使用するコードを明確に指示できるだけの知識を身につけることで、AIをよ